

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25463292

研究課題名(和文) 看護学生の私的スピリチュアリティ、首尾一貫感覚と抑うつとの因果関係に関する研究

研究課題名(英文) Causal relationship between spirituality, sense of coherence and depression in nursing students

研究代表者

山田 恵子 (KEIKO, YAMADA)

富山大学・大学院医学薬学研究部(医学)・助教

研究者番号：00600230

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：看護学生の抑うつ状態を全人的(神氣的 神気性[私的スピリチュアリティ]、 心理的 首尾一貫感覚、 社会的 援助的コミュニケーションスキル、 身体的 日常生活ストレス)に捉え、看護学生の抑うつ要因モデルを作成した。

看護学生の抑うつ要因モデルより、看護学生の抑うつ状態に影響する要因として、首尾一貫感覚と神気性が抑制因子、日常生活ストレスが増強因子であることが示唆された。また、援助的コミュニケーションスキルには首尾一貫感覚、神気性(私的スピリチュアリティ)と影響し合うことで、抑うつ状態を低減する可能性があることが見出された。

研究成果の概要(英文)：We examined the depressive state of nursing students holistically ((1) spiritually spirituality, (2) mentally sense of coherence, (3) socially therapeutic communication skill, and (4) physically daily life stressor), and prepared a depression factor model for nursing students.

Findings with this depression factor model for nursing students suggested that factors affecting a depressive state in nursing students are sense of coherence and spirituality as inhibitory factors and daily life stressor as a potentiating factor. In therapeutic communication skill, it was found that depression may be reduced by the interaction between sense of coherence and spirituality.

研究分野：精神看護学

キーワード：看護学生 抑うつ 私的スピリチュアリティ 首尾一貫感覚 援助的コミュニケーションスキル 日常生活ストレス 共分散構造分析

1. 研究開始当初の背景

2009年の厚生労働省患者調査によって、我が国におけるうつ病・躁うつ病などの気分障害の推計患者総数は、60.3万人(平成8年)から108.8万人(平成20年)へと12年で1.8倍に増加していることが明らかにされた。気分障害の患者数を年齢別にみると20歳代前後を境に患者数が上昇しており、男女別では男性より女性が1.7倍多く、いずれの年齢層でも女性が男性を上回っている。

気分障害の危険因子はライフステージごとに特徴を持つため、その第一次予防としては、ライフサイクルに合わせたそれぞれの対策が必要となる。たとえば、青年期の特徴として、ストレスイベントの多さ、アイデンティティという発達課題の獲得に関連した自己注目(self-focus)の高まりなどが指摘されている(及川ら、2009)。特に大学生(青年期後期)においては、アイデンティティを模索しながら、社会人として独立していく準備の時期であり(澤田、2003)親からの独立、環境の変化、対人関係、勉学、進路の決定、就職活動などさまざまな面での適応・対処能力が要求される。井上(2008)は、「看護学科学生は一般学科学生よりもメンタルヘルスの観点から何らかの困難を抱えており、抑鬱な気分の傾向がある」と述べている。また、1998年から増加している自殺の背景とうつ病との関連も指摘され、自殺防止の観点から抑うつ予防の必要性が重視されてきている。先行研究により、看護学生の抑うつ状態(精神的健康)に関して、さまざまな要因や関連が示されているが、看護学生の抑うつ状態を全人的観点から捉え、中でもスピリチュアルな側面を含めて、その要因を分析した研究は見あたらなかった。そこで、本研究では、看護学生を対象とした認知行動的アプローチによる抑うつ予防プログラム看護学生版を実施し(週1回40-50分の教示・演習ワークで構成、計6回)看護学生の抑うつ状態を、

神気性[私的スピリチュアリティ](スピリチュアル面)、首尾一貫感覚(メンタル面)、援助的コミュニケーションスキル(ソーシャル面)、日常生活ストレス(フィジカル面)の4側面で構成し、この4側面と抑うつ状態との因果関係を明らかにすることにより、看護学生ひいては看護職者の抑うつ予防(メンタルヘルス対策)の発展に寄与することができると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、看護学生の抑うつ状態を全人的(神气的 神気性[私的スピリチュアリティ]、心理的 首尾一貫感覚、社会的 援助的コミュニケーションスキル、身体的 日常生活ストレス)に捉え、~の要素と抑うつ状態との因果関係を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 介入群(A大学の看護学生80名)に抑うつ予防プログラム看護学生版を実施し、介入群および対照群(A大学の看護学生160名)を対象に自記式質問紙調査を実施した。質問紙は、スピリチュアル面の指標として神気性(私的スピリチュアリティ)評定尺度(SRS-A)15項目、メンタル面の指標として首尾一貫感覚日本語版(SOC-13)13項目、ソーシャル面の指標として援助的コミュニケーションスキル測定尺度(TCSS)17項目、フィジカル面の指標として大学生用日常生活ストレス尺度(DLSS)23項目、抑うつ状態の指標として抑うつ症状尺度日本語版(CES-D)20項目、合計5尺度88項目で構成した。これら5つの変数を用いて本研究の仮説モデル(図1)を作成し、共分散構造分析を行った。

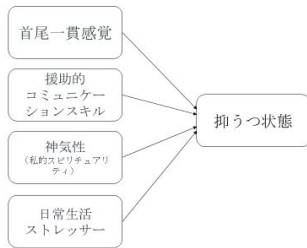


図 1. 本研究の仮説モデル

(2) 用語の定義

神気性 (私的スピリチュアリティ)

「意欲」「深心」「意味感」「自覚」「価値観」で構成される、自分自身および自分以外との非物質的な結びつきを志向する内発的なつながり性とする。

首尾一貫感覚

「把握可能感」「処理可能感」「有意味感」で構成される、その人の生活世界全般に対する志向性とする。

援助的コミュニケーションスキル

「心理的コミュニケーションスキル」「共通 (交差的) コミュニケーションスキル」「神气的コミュニケーションスキル」で構成される、相手の内面的成長を促すための言語的または非言語的な援助的関わり技能とする。

日常生活ストレッサー

「実存的 (自己) ストレッサー」「対人ストレッサー」「大学・学業ストレッサー」「物理・身体的ストレッサー」で構成される、日常生活上におけるストレスフルな出来事の実験の有無およびそれが気になった程度とする。

4. 研究成果

(1) 抑うつ予防プログラム看護学生版の検討

抑うつ予防プログラム看護学生版実施前後および、介入群と対照群の比較において、各変数間に有意な差は認められず、抑うつ予防プログラム看護学生版の効果は明らかでなかった。これには、抑うつ予防プログラム看護学生版を認知行動的アプローチとして認知面に焦点をしばって展開したことが影響していると考えられた。このアプローチは、児童から大学生まで幅広く実践されているが、意思で前頭皮質を働かせてプラス思考に変化させ、情動の処理に関わる扁桃体の興奮を鎮める方法であり、情緒が不安定で情動発現の強い人たちには持続的効果がかなり限られていること (上田ら、2012) 抑うつ状態には個人の内面的要素が関与していることから、その効果を抽出することができなかったと推察した。

(2) 仮説モデルの検証

共分散構造分析を行った結果、適合度は CFI=0.91、AGFI=0.79、RMSEA=0.07 を示し、得られた最終仮説モデルが概ね高い説明力を有していることが示唆された。この仮説モデルを「看護学生の抑うつ要因モデル」と命名した (図 2)。

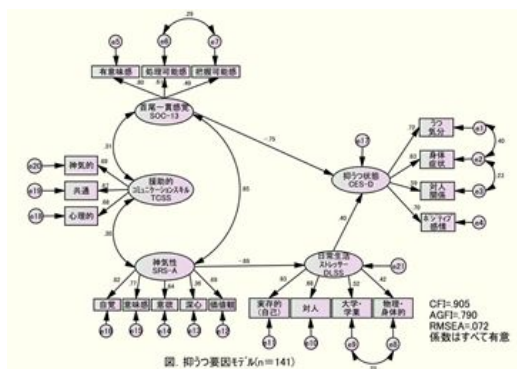


図 2. 看護学生の抑うつ要因モデル

(3) 首尾一貫感覚、日常生活ストレス、神気性(私的スピリチュアリティ)と抑うつ状態との関連

首尾一貫感覚には抑うつ状態を低減する働きが認められた(因果係数 - 0.75)。日常生活ストレスには抑うつ状態を増強する働きが認められた(因果係数 0.40)。また、神気性(私的スピリチュアリティ)には日常生活ストレスを介して間接的に抑うつ状態を低減する働きが認められた(因果係数 - 0.28)。これらのことから、抑うつ状態を低減する働きが認められた首尾一貫感覚と神気性(私的スピリチュアリティ)を促進することに加えて、抑うつ状態を増強する働きが認められた日常生活ストレスを改善することが、看護学生の抑うつ状態を抑制する可能性が示唆された。

(4) 援助的コミュニケーションスキルが抑うつ状態に及ぼす影響

首尾一貫感覚と神気性(私的スピリチュアリティ)(相関係数 0.85)、首尾一貫感覚と援助的コミュニケーションスキル(相関係数 0.31)、神気性(私的スピリチュアリティ)と援助的コミュニケーションスキル(相関係数 0.30)にはいずれも正の相関関係が認められた。援助的コミュニケーションスキルと抑うつ状態には因果関係は認められなかったが、首尾一貫感覚、神気性(私的スピリチュアリティ)、援助的コミュニケーションスキルの3変数間に相関関係が認められたことと、首尾一貫感覚および神気性(私的スピリチュアリティ)に抑うつ状態を低減する働きが認められたことから、その概念より比較的獲得しやすいと考えられる援助的コミュニケーションスキルを高めることが、首尾一貫感覚および神気性(私的スピリチュアリティ)を高めることに繋がり、抑うつ状態を低減する

ことが推察された。

なお、本研究成果は、日本精神保健看護学会誌第26巻第1号に投稿予定である。

引用文献

厚生労働省(2008)、平成20年患者調査 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanjya/10syoubyou/suihyo18.html>、2011.06.01

及川恵、坂本真士、自己効力感尺度の向上を目的とした実践に関する効果研究、健康心理学研究、22(2)、2009、60-66

澤田忠幸、本学看護学科学生の悩みと精神的健康に関する調査、愛媛県立医療技術短期大学紀要、16、2003、23-31

井上真弓、江藤和子、柴田文子、看護学生のメンタルヘルスに関する支援(第一報)日本看護学会論文集(地域看護)、39、2008、45-47

上田敏子、宗像恒次、抑うつ予防のためのSATグループ介入 大学生を対象として、ヘルスカウンセリング学会年報、18、2012、11-18

5. 主な発表論文等
〔学会発表〕(計3件)

山田恵子、比嘉勇人、田中いずみ、精神看護臨地実習前後の援助的コミュニケーションスキルの変化に関する研究、日本精神保健看護学会第26回学術集会、2016年7月2-3日、滋賀

山田恵子、比嘉勇人、田中いずみ、看護学生の精神的健康に関する実態調査、日本精神保健看護学会第25回学術集会、2015年6月27-28日、茨城

山田恵子、比嘉勇人、田中いずみ、看護学生における抑うつ要因モデルの検討、日本精神保健看護学会第24回学術集会、2014年6月21-22日、神奈川

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.med.u-toyama.ac.jp/seishinkango/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田恵子 (YAMADA, Keiko)

富山大学・大学院医学薬学研究部(医学)・
助教

研究者番号：00600230

(2) 研究分担者

比嘉勇人 (HIGA, Hayato)

富山大学・大学院医学薬学研究部(医学)・
教授

研究者番号：70267871

(3) 研究分担者

田中いずみ (TANAKA, Izumi)

富山大学・大学院医学薬学研究部(医学)・
准教授

研究者番号：80293299